Damaspuinado（ダマスキナード）と
肥後象がんの研修と考察について。

伊 藤　　恵 美 子

（ 肥 後 象 が ん ）

目　次

1　研修概要

2　はじめに

3　研修報告

≪道具、素材≫

≪制作工程≫

<１>ベース作り

<２>レイアウト、マテアール(打ち込み)

<３>パボナール

<４>浅浮彫

<５>仕上げ

≪PEZ(ペス)練り直し≫

≪トレドとダマスキナード≫

4　視察報告

≪サラマンカ視察≫

≪ビルバオ視察≫

≪バルセロナ視察≫

5　研修を終えて

１．　研修概要

（1）　主題

・スペイン象がんダマスキナードの技法の体験と調査。技法、技術の交流。

・スペインを中心とした欧州各国の美術品、工芸品の鑑賞及び調査。

（2）　目的

伝統工芸の定義は、伝統の技法で、伝統の材料を用い、伝統の特色を生かし、その時代のニーズに応えるものを創作する工芸となっています。しかし、現代の若い世代から見た肥後象がんは、見方によっては、昔ながらの物、マンネリ化したものと見られるような傾向にあることも事実です。

その様な状況に変化をもたらし新風を吹き込むため、伝統柄だけでなく、独自の現代的なデザインを作品に取り入れ、また、鉄材を加工するなど試みてきました。

今回の研修で、ヨーロッパの伝統工芸であるスペイン象がんの技法・材料・特色が、時代と共にどのように発達してきたのか、現代の工芸品としてどのように生活に根差しているのかを、直接の指導や鑑賞を通して学びたいと思います。

そのなかで日本で独自に発達してきた肥後象がんとの相違点を考察し、デザインや技法に応用する事が、これからの肥後象がんの新しいスタイルを確立していくことに繋がるかと考えます。

現代を生きる伝統工芸家として、肥後象がんの次世代を担える存在になるために、貴重な一歩として、この制度を利用させて頂きました。

（3）　主な研修先

スペイン　トレド

Ildefonso suarez 工房

（4）　研修期間

2009年　1月　16日　　～　　2009年　7月　15日

２．　はじめに

日本において、私は伝統工芸の金工というジャンルで、肥後象がんに携わっているのですが、世界的にはスペインと日本が象がんの技術で有名だという事を知識として知っていました。しかし、実際、その様な技術があると聞いていても、どのような工程で作られて、どのような流通をしているのか、どのようにして伝統を維持しているのか、など、目で見てみないとわからないことは沢山あるのではないかと思い、スペインへ行ってみようと決意しました。

今回、研修先を決めるにあたって、全くスペインへのコネクションがなく、この制度に応募するまでにも、その後も、スペインに行ってからも、ずっと、スペインに繋がる方、象がんに繋がる方、いろんな方に話を伺いに訪ね歩く日々でした。

見ず知らずの私に、出会った人々は日本でも、スペインでもほんとに優しく接してくださり、沢山の人々に助けられる研修となりました。

まずは、人と出会い、繋がっていけたからこそ、この研修は達成できたのではないかと思います。

研修の報告に際し、この機会を与えて下さった九州電力の皆様へ、沢山の方々への感謝の気持ちをまずはじめに伝えたいと思います。ありがとうございます。

３．　研修報告

今回研修を受けるにあたり、私を受け入れてくださることになった方は、40 年以上のキャリアで、弟子を二人もっていらっしゃるという、イルデフォンソ先生という方で、長いキャリアだと伺っていたので、御年配を想像していたのですが、54 歳という、自分の父よりも若い先生でびっくりしました。13 歳の時から象がんを作っているということで、研修がはじまってすぐに先生の誕生日が来たので、折り紙で花の飾り玉を作ってプレゼントしました。工房は、先生のご自宅で地下が作業場になっていました。日本と同じで、金属を叩いて作業するので、音がすこしでも小さくなるようになのかなとも思いました。そこで約半年間修行してまいりました。

作業の工程としては、想像していたものと全く違い、日本の技術が応用出来るかと考えていたのですが、基礎の基礎からの研修となり、驚きと苦戦の連続となりました。

≪道具、素材≫

道具としては、右の写真１にある、マテと呼ばれる打ち具と、マセタと呼ばれるハンマーによって打ち込み、浅浮彫鏨によって制作していくことになります。ツール自体は似ているのですが、使い方が全く違い、初めての体験ばかりで、これからの研修がとても楽しみに感じました。

1.　damasuquinado　道具

ダマスキナードは肥後象がんと違い、埋め込み用の金、銀材が箔に近く、薄い素材なので、埋め込み自体はスムーズに出来るのですが、薄い分作業中にちぎれたり、風で飛んだり、ちょっとした力の加減でくしゃくしゃと形が崩れたりするという心配もありました。肥後象がんでは、板の金、銀材を使うので、叩き込むという感じで、磨いて仕上げるのですが、トレドの象がんは鏨の技術が多用されていることに気付きます。日本の技法では浅浮彫といって、影

2．練習に使用した鉄板

をつけたり、立体感を出したりと、リアル感の追及を見る作品を多く見ることが出来ます。日本での作業ではあまり、使わない技術も多く、基礎からの研修となり、学ぶことが多いと感じました。

素材として、箔の他に線があり、その線の使い方が大変難しく、日本では、線の太さが色々あるのですが、こちらでは、髪の毛の細さ（12㎜ccras）の線のみを使い、太い表現のところには、その線に沿わせて更に埋め込んでいくという、繊細な作業で、かなりの集中力を必要とされます。

箔の練習には、サンドイッチなどを包むアルミ箔で銀の代りに浅浮彫の練習をしていましたが（写真２）、一か月ほど基礎の練習をした後、箔も銀を使ってのブローチなどの制作に入りました。

それまでは、埋め込み方や鏨の使い方の練習で、葉書大の鉄板に作業していたのですが、そのまま、作品となる作業に入りました。

決まったサイズにバランスや作業内容を考えながらの作業でなかなかに難しく感じました。

≪制作工程≫

<1>　ベース作り

鉄に加工してくという点では、ダマスキナードも肥後象がんも一緒なのですが、肥後象がんは鏨で布目を切っていくのに対し、ダマスキナードはクチージャと呼ばれる刃物で鉄面に細かく傷をつけていくようにして、ベースを作っていく、というのが、本来の製法ですが、今は薬品で鉄面を侵すのが一般的になっています。

研修では、クチージャを使う方法を体験した上で、加工済みのチャパ（鉄の台）に作業していきました。

<2>　レイアウト、マテアール（打ち込み）

チャパをペス（ヤニ）に固定したら、素材で紹介した、型で抜いた箔をチャパの上にレイアウトして、仮止めしていきます。箔の配置がきまったら、一度打ち込んで、更に、金、銀糸を埋め込んでいき、さらに上から叩き締めていく。

3．師匠の店舗での実演作業体験

研修を受け始めてすぐは、基礎から教えていただいたので、伝統的な、鳥と花のモチーフで制作していたのですが、後半、オリジナルのデザインで制作の許可をもらい、制作している時に、トレドの象がんは黒い部分が少なく、錆びにくくする為に画面を埋めるような柄が多いと聞いていたのもあり、空間を使わないデザインが多いので、黒の空間を使ってはいけないと思いこんでいたのですが、使った方が君のデザインはもっと素敵になるよと言っていただき、目から鱗な気分でした。日本は空間の美を追求していますが、スペインでは装飾の美を追求しているイメージがあり、師匠が作るものもそのようなデザインが多かったのですが、日本の若い人に持ってもらうのならば、今ある同じものを作ってはだめだと言われ、どの国も時代とともにという感覚は一緒なんだと再確認しました。

4．師匠の作品　金で埋め尽くす様なデザイン

<3>　パボナール

　ペスから外したチャパをパボナールします。パボナールとは、鉄を黒くする作業の事です。ガスバーナーで高温に熱した薬品で変色させ、その後、水に投げ込むのですが、その時に「ボンッ！！」という爆発音と水蒸気が一瞬で上がります。こちらも劇薬のため、写真５の様に、しっかりとプロテクトしてからするようにと注意を受けましたが、日本でこの作業をするには簡単ではなく、相当な設備がいると思いました。

　しかし、黒くする作業自体はほんの２、３分で、肥後象がんでは、早くて１日かかる作業なので時間的には早くできるので羨ましく思いました。

5.　パボナール作業

<4>　浅浮彫

　黒く変色させた後、浅浮彫用の鏨で影をつけたり、立体感をだしたり、模様をつけたりという作業をします。

　職人によって、使う鏨の形や、使用する鏨の数も違うそうで、その表現もそれぞれのこだわりがあるようでした。

　微妙な力の入れ方でも、全く仕上がりの雰囲気も変わり、この作業は特に熟練の技術が必要なんだと感じました。

6.　浅浮彫

<5>　仕上げ

再びペスから取り外し、余分なペスをアルコールで洗い流し、仕上げに錆び止めを表面に添付して、パーツのあるものは組み上げて、完成です。

7.　師匠宅工房

≪PEZ（ペス）練り直し ≫

ペスとは日本でいうヤニ台（象眼する鉄材を固定するための台）で、そのペスの練り直し作業を一緒にしました。

日本のヤニ台はまっ黒なのですが、こちらは赤茶色で粘土質も混ざっているためこの様な色なんだと言われていました。まるでチョコレートを溶かしているように見えるのですが、作業はハードで、ガスタンクからの強力な炎と闘いながらの作業は日本も同じですが、丸一日掛かりでとても大変でした。

8.　師匠イルデフォンソ

9.　ペス練り直し

≪トレドとダマスキナード≫

大きな作品例えば、絵皿だったり、額だったりを作りたいと思って師匠に話してみたのですが、そのサイズの作品を作るのに、自分は何十年も修行したと言われ、そう簡単には手をつけさせてはもらえませんでした。

日本もですが、職人としてのプライドがしっかりとある国だと思いました。そして、今、弟子をとる先生も少なくなってきていて、自分の作業時間を割いて、弟子を見るには生産効率が下がるので、なかなか弟子としてとってはくれない中、短期でしかも外国人の女性を受け入れてくれるという条件はなかなかないと思うよ、いい先生に会えたねと、トレドの他のダマスキナードの職人さんに言われました。

しかし、何故こんなにトレドのダマスキナードは有名でかつ、何百年も続いていて、人気が衰えないのだろうかと思い、現地でいろんな人の話を聞き、調べてみました。

トレド全景

まず、第一に、トレドという場所はカスティージャラマンチャ州の州都であり、16 世紀までスペインの首都であったこと、それゆえ、お金持ちも多く、刀や聖杯など金銀細工に長けた職人が沢山集まっていたということ、そして、トレド囲むように流れるタホ川の水が、刀の焼き入れに適した水であったことなど、沢山の要素が絡み合い、古くから保護されてきたことが大きい理由の一つでしょうということでした。

師匠イルデフォンソの作品

そして、第二に、国際的な観光客が多いということも挙げられます。『スペインに一日しか居れないのならトレドに行け』と、古くから言われているのもあり、日本人や、アメリカ人、世界各国からの観光客が絶えず、お土産としての需要があるということでした。

しかし、残念なことに、日本と同じように、後継者がだんだんと減ってきているという現実もあるようです。

今現在、職人としてトレドで制作している人は 50～70 人前後だそうですが、85%以上が現在 50 歳以上だということらしく、20 年後にはきっと、5、6 人位になってしまうのではないかと言われていました。

実際、象がんの学校も何年か前まではあったそうなのですが、今は廃校になっているそうです。

その理由からも、トレドの象がんは特に新しい柄やデザインというものは、飛びぬけて出ている訳ではなく、あくまでも、伝統柄の鳥と花のモチーフであったり、幾何学模様であったりという、どの店舗を見ても特に代り映えしないという印象を受けるのはしかたのないことなのかなとも思いました。

このような背景から、私を指導して下さった師匠は、基礎をある程度経験した段階で、『自分の思うオリジナルのデザインをしなさい。今あるものを作っても君にとって意味はない』と言われたのは、若い世代に使って欲しいのであれば、その感性を使いながら象がんで表

現をしなさいと言って下さったんだなと思いました。その言葉だけを聞いた時はすごくびっくりしました。それでは伝統工芸を研修しに来たのに、何をどう報告すればいいのかと、戸惑ってしましましたが、いろんな方の話を聞き、いろんなものを見て回り、いろんな事を体験できたから、今、その様に思えるのだなと思います。

４．　視察報告

研修の主題として、『スペインを中心とした欧州各国の美術品、工芸品の鑑賞及び調査。』と、挙げていたのですが、私が約半年間滞在した場所はトレドといって、世界遺産に指定されている町でした。１６世紀からほぼ何も変わらないという町の中に住むという体験をして、更にスペインは世界的にも世界遺産の登録されている場所が多い国だということをスペインに訪れてから知りました。出発前は大きな都市をいろいろ回り、有名な美術館、博物館をたくさん回りたい！！と、思っていたのですが、スペインだけでも、沢山の素晴らしい場所があり、国内を回るのと、研修をきちんとこなしていくのを考えると、国外にはなかなかいけませんでした。

国内で、回って、印象が深かったものから報告いたします。

Salamanca,Plaza Mayor

≪サラマンカ視察≫

スペイン最古の大学がある学生の町として有名ですが、どうしても行きたかった場所があり、行ってまいりました。

Museo art nouveau y art deco（アールヌーヴォーとアールデコ美術館）で、ガラス工芸、家具、宝石、人形など１９世紀末芸術の貴重な作品が展示されていて、１６世紀の町に住んでいた私にはとても魅力的なものばかりでした。特に、建物自体もとても美しく、写真禁止だったので、いろいろとスケッチに描きとめたりと、時間がいくらあっても足りない一日となりました。カテドラルも新旧と繋がっていて、スペインは宗教によって芸術が発展していったんだと改めて感じさせられる場所でした。

≪ビルバオ視察≫

Museo Guggenheim

こちらも、帰国ギリギリ前に行って参りました。

バスク地方にある産業と文化の町で、*Museo Guggenheim*（グッゲンハイム美術館）はもちろん、スビスリ橋や、日本人の建築家の手掛けた、磯崎ゲート等を見て参りました。

町全体がアートに包まれているようで、とても素敵な町でした。

スペイン国内なのですが、バスク語が話されているエリアで、同じ国内なのですが、標識の言語が違ったりと、色んなところに興味を引き付けられる町でした。

≪バルセロナ視察≫

Temple de la Sagrada Familia

Madrid に次ぐ、大きな都バルセロナ。こちらでは、沢山の美術館、博物館、建築物がこれでもかとある街で、スペインで再び訪れたいと思う場所の一つになりました。

特に、サグラダ・ファミリア聖堂を筆頭に、カタルーニャ美術館、バルセロナ現代美術館、ピカソ美術館等は一日かけてしっかり見たいと思わせるものが沢山ありました。

サグラダ・ファミリアはまだまだ建設中ですが、しかし、天にむけて伸びる塔はものすごい迫力を与えてくれました。町の中にも沢山のガウディの建築物があり、個々の個性を放っていました。

５．研修を終えて

研修を終えてみて、正直に思うことは、とても短い時間だったという事です。

実際、全てが初めてで、いろいろな物に興味を惹かれ、沢山の事を経験したい！という気持ちが、最後まで切れることなく、日々がとても刺激的でした。

象がんを教えて下さった、イルデフォンソ先生もすごくいい先生で、その土地のお祭りに連れて行って下さったり、お昼ご飯会にご招待して下さったりと、スペインでの生活習

慣や、風習など沢山の事を教えて下さいました。

最後の日には、『ここは君の家だから、いつでも帰ってきなさい』とご夫婦で言って頂き、第二の故郷が出来たと感動してお別れしました。

トレドでも、マドリッドでも、いろんな方にお会いして、いろんな話を聞き、多国籍な友達もいっぱい出来て、日本に居ては到底感じることの出来なかった感覚や感情が自分でもはっきりと感じる事が出来、とても素晴らしい経験となった事は言うまでもありません。

期間が決まっていた分、しっかりと目標をもって、動きまわる事が出来たのかとも思います。しかし、まだまだ、いろんな所に行って、いろいろな人と出会い、いろんな物をみて、いろんな事を感じたい！！という気持ちが薄まりません。

それは日本でも同じことだと思います。人と繋がっているからこそ、いろんな世界が見えるのだと思います。

これからは、肥後象がんを通して、スペインとの懸け橋になれるようにと、スペインの職人さん達からも課題を出されて帰って参りましたので、もちろん、大きな目標として、制作を通し、表現出来ていけるようにと日々励んでいく気持ちでいます。

最後になりましたが、今回の研修にあたって、私をこの制度の研修生として推薦して下さいました熊本県伝統工芸館館長様をはじめ、スタッフの皆様、白木光虎先生、研修に至るまでにご協力下さいました皆様、お名前をあげるとキリがない位にほんとに沢山の皆様に心より感謝いたします。

そして、九州電力株式会社により、このような貴重な機会を与えていただいたことを心より深くお礼申しあげます。

ほんとうにありがとうございました。

平成２１年度研修生

伊藤　恵美子